

## 心理科学部研究紀要第2号の発刊にあたって

心理科学部長 阿 部 和 厚

心理科学部は、平成17年度で完成年度を終え、平成18年度には新たな第1歩を踏み出すことになった。

ここで重要なキーワードは共同・共生である。

北海道医療大学は、30年前の薬学部から始まり、歯学部、看護福祉学部、そして心理科学部と学部を設立し、平成18年3月には心理科学部が完成年度を終えた。4学部が設置され、大学としても完成をみたといってよい。しかし、これらの学部は互いに別々に開始され、互いが独立していて、総合大学としての連携、まとまりはまだ明確でない。医療系大学としてまとまった個性を発揮するのはこれからである。

厳しい大学間競争の時代に直面して、松田学長は、昨年の暮れに本学の最重要課題として教育の推進、とくに全学的な共同のなかでの教育改善を図るという方針を明確に打ち出した。ここに本学の生き残りがかっているというのである。これまで各学部は学部としての専門性のある教育の努力をしてきた。しかし、全学的な統合の視点はきわめて不明確である。全学的な教育は、ほとんどの大学では、教養教育または共通教育と呼ばれる形で全学的カリキュラムに表現されている。しかし、本学の各学部のカリキュラムには、全学に共通する教養教育は見えない。本学は、今、各学部の教育の中で底力として培われてきた教育力に全学的な共同による一本の筋を通す絶好のチャンスである。そして、本学の特色をさらに一層はっきりとさせることになる。

学部においても同じ目線が必要である。心理科学部は、臨床心理学科と言語聴覚療法学科の二つの学科から成り立つ。高橋前学部長がいうように、二つの学科が心理科学の名の下に集まることは大きな意味があり、本学部の特色である。だが、これが特色となるような共同は、まだ不明確であり、これからである。まず学科運営でも各教員が一致協力共同することが必要であり、また両学科で研究や教育に共同を明確にしなければならない。幸いに、今年になってこれまでと違い、学科の教育、学部の教育、研究のあり方、学部の将来について論を交わすことが日常となってきた。何時間も議論し、夜半となることも多い。若手教員の覇気に期待したい。中堅やベテラン教員の建設的意見、積極的行動にも期待したい。ぜひ、学部の将来を熱く語る議論に多くの教員が加わってほしい。全教員の声となってはじめてこの学部の大きな前進がみえていくであろう。共に生きる場として大学の将来の発展は、各教員の共同にかかっている。

教育では、両学科の教員がチームで担当するような科目の創出、それに研究面でも、各科内や学科間でのチーム研究が生まれる必要があろう。そして、このための検討グループが発足しないといけないのではないか。

この紀要は、学科の教員、構成員の共同・共生を表現する場として重要である。